
恋する占い玉

エール・クリストファ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋する占い玉

【著者名】

エール・クリストファ

【あらすじ】

黒髪碧眼の美形勇者さまが、夢中な相手は「占い玉」。昼間は肌身離さず持ち歩き、夜は枕元で話しかける。「これは誰にも渡さない！」そう、心に誓い、奪いに来る男たちを今日も蹴散らし独走態勢。そんな偏愛（変愛？）ストーリー。（いえ、本当は純愛ストーリーなんですね…）お話は「占い玉」の目線で進みます。

プロローグ（前書き）

主人公のサリーのように、のんびりほんわか、ゆったり更新になる
と思います。
(未完の他作品もあるし…)

プロローグ

私はその昔、高貴なたのお膝の上でいつもウトウト、幸せな毎日を過ごしていた。

髪を優しく梳かし、時たま耳たぶを弄ぶ白く綺麗な長い指。

そつと目を開けて、頭上を見上げると

紫色の思慮深い瞳が、優しく私を見つめている。

それは魔法の国の王様。

私のことを誰よりも可愛がってくれる。

大きくて温かい、大切な人。

彼の膝の上で、いつもお花畠の夢を見ていた。

こんな日が、ずっとずっと続くんだと思つていた。

＊＊＊

しかし、年月が過ぎ、私が大人の姿に成長すると男たちからの執拗な視線にさらされるようになる。

王様と離れている僅かな時間に何度も攫われそうになつた。

強引な求愛を前に涙を流すこともあった。

見かねた王様は、私に魔法をかけた。

誰にも攫われないように
誰も触れることができないよう

ローズクオーツ*で作られた
丸い占い玉の中に
私を閉じ込めてしまった。

* * *

王様の独占欲は、私が想像していたよりも
遙かに強かった。

結局それ以降、彼は一人きりの時以外では
私を占い玉から出すことをせず。

そしてそのまま、300年の生涯を閉じてしまう。

王様の魔力でしか、占い玉から出ることができない私は
全てを諦めて、長い眠りについた。

* * *

どれほど時間が過ぎただろうか…

辺りが崩れ落ちる音で、私は目を覚ます。

どうやら王様の城が崩壊の危機に晒されているようだ。

眠い目をこすつていると

青白い顔の男がこちらを覗き込んでいるのが見えた。

「なんと強い魔力を秘めた占い玉だ。

すごいものを見つけたぞ」

その魔法使いの成り損ないは、魔力のない水晶玉を持ち歩き
あたかも未来を予見したかのよつた嘘をまき散らす男だった。

それまでの水晶玉をポイと捨て

私を黒い別珍の袋へ、大事そうにしまい込む。

嫌で嫌でたまらなかつたけれど

そこから私の第二の人生が始まった。

＊＊＊

150年もの間、占い玉として眠つていたせいか
私の中の魔力は、なかなか強大になつていた。

未来も、過去も、世界の裏側も

望めばいくらでも覗くことが出来る力が備わつた。

そんな占い玉を、魔法使いたちはこじぞつて奪い合つた。

最初に王様のお城から私を盗み出した男は
あっけなく本物の魔法使いに私を奪われる。

そこで出逢つた魔法使いは優しいふくよかな中年女性で
王様以来、初めて信じられると思える存在だった。
だから多くの過去視、予見、遠視に協力した。

しかしあまりに力を発揮しすぎて

彼女の命と、占い玉が、悪い魔法使いに狙われてしまつ。
そして死闘の末に、彼女は私を手放すことになる。

最後に見た彼女の傷だらけの姿に
私はそれまでの力の使い方を反省した。

そして新たな持ち主となつた、いけ好かない魔法使いには
不吉な予見ばかりを、与えることにした。

やがて彼は絶望の末に身を滅ぼすことになる。

それらのことがあって、私は

『意志を持つ占い玉』

『この世で最強の魔力を秘めた占い玉』

などと、もてはやされるようになつてしまつた。

そして何人も魔法使いに酷使され続けると

さすがに私の魔力も尽きてきた。

欲望に巻き込まれることに辟易して
魔力を回復させる気も起きなくなつた。

お告げをするのは、じぶんくたまに
気が向いた時だけ。

既に魔力が失われたと、人々の口に上るようになった頃
私は初めて、魔法使いではない、一人の勇者の懷に納まつた。

プロローグ（後書き）

* ローズクオーツ＝ピンクの水晶

第1話 かわいいひと

「サリイ～～～！」

聞き慣れた声で

心地よいまどろみから揺り起される。

「モーリー・ケブリック様」

見ると
絶麗な碧し瞳か
「お山を覗き込んでいた

化粧くさい女に
襲われた

はあああ、またですか。

•
•
•
•
•
•

「おー！ 一度寝するなよー」

ちつ。

仕方なく、魔法でジークの頬を優しく撫でてあげる。

ついでに口紅の跡も消してあげた。

「ここはサルルート國の王都ルー。繁華街の一角に建つ、中流の宿屋

質素な部屋のベッドの上にローズクオーツの占い玉を置き

横に寝そべつて、話しかける黒髪碧眼の勇者。

はたから見たら十分に異常な風景。

でも彼にとつては至つて日常的な風景だつた。

「魔族退治を頼まれたんだけど
断つた方がいいかなあ？」

うるうる、子犬みたいな瞳。

毎度毎度、甘え上手なんだよね。

過去視で今日の出来事を見てみた。

＊＊＊

仲間を引き連れて王宮へ赴くジークフリード。
お仕事中は、漆黒の髪に青いターバンを巻いて
きりつと精悍な表情だ。

切れ長の目、纖細で高い鼻筋。

軍神の彫像のように完璧なラインを描く頬。

甘さを漂わせる形の良い唇。

尖った顎が、美しいパーツを最良のバランスで
まとめあげている。

たとえそこに怒りの色が浮かんでも
その美しい顔で睨まれたならば

どんな姫でも一瞬のうちに恋に落ちるだらう。

王はそんな彼の美貌に感嘆の声を上げてから

近頃、森で次々起きている獵奇殺人と姫をもじり、という脅迫状の話をした。

すると案の定、ジークの虜となつた姫がバタバタバタッと走り出した。

「勇者さま。どうお助けくださいませー!」

濃厚な化粧の匂い。めまいがするほど甘い香水の香り。そしておまけに、真っ赤な口紅までくっつけてよよよ…と姫は彼に縋つた。

「あ〜、いつものですね」

ジークがむつとする。

「そんな他人事のような声で言つな

「だつて、いつものことじやないですか」

「オレはいじつのが苦手なんだ」

「早くあじつ方法を覚えてトセ」

「あの姫はあいつ諦めてくれるだらうか?」

・・・・・

私は心中で、つんと横を向いた。

「魔力の弱い今の私には、未来を視る」ことはできません。
「自分でなんとかなさいませ」

「冷たいなあ……」

やるせない表情で黒い前髪をかき上げ
ふうっと息を吐く。

ターバンを外した後の、
リラックスした顔が色っぽい。

おっととと、また見とれてしまいました。

・・・クスクスクス。

小さな笑い声が聞こえる。ジークではない。
そして届く微かなメッセージ。

……田覚め兆候……

「どうした?」

ジークも気配を感じて、表情を変える。

「あなたの守護精霊からのメッセージです」

ジークフリードはこの世に生まれ落ちた瞬間から

『光』『火』『水』『風』『地』の五大精霊の加護を受けている。つまり超天然幸運体质。

五大精霊はとても彼を大切にしていて戦いの最中に彼の身を守るだけでなくこうやって時たま、メッセージを送つてくる。

「何か新たなものが目覚める兆候、と言っています」

「目覚める兆候…」

「ジークも何か精霊から感じるものはありましたか?」

「うーん…」

少し布団に顔を埋めてから、再びこちらに顔を上げる。

「暗い森のビジョンかな。やっぱり魔族討伐のことだよね」

「そうですね…」

ジークは少し考えて決心がついたらしく

ガバッと起きあがり、ターバンを秀でた額に締め直した。

「よし、じゃあみんなと夕飯を食べながら

今後の予定について話し合おつ。

サリーも一緒に来て

そう言つと、彼は私を拾い上げ碧い別珍の袋に、丁寧に入れた。

それを腰ひもに引っかけて
一旦、動きが止まる。

「何か…とてもかすかに…
不安のタネみたいなものが見えた気がするんだ」

そして袋の中の私の存在をしつかり確認してから
歩き出した。

ジークフリードには私とも精霊とも違う
独特の勘の良さがある。

だから彼の言つ「不安」がどこからくるのか
私には知ることができなかつた。

でも…

ジーク。 とんでもない甘えつ子。
私のかわいいおバカさん。

大丈夫。

私も精霊と共に、いつまでもあなたを見守つてゐるわ。

第1話 かわいいひと（後書き）

既に冒頭から変態っぽい？ 勇者たま。 でもかっこいいんですねよーーー。

第2話 甘やかします（前書き）

急遽、残酷表現のフラグを立てました。この章ではまだ戦いはあります
ませんが、念のためその辺を「」承の上、お読みください。

第2話 甘やかします

ちゅうと甘やかし過ぎかもしません…

何せ占い玉になつてから（正確には閉じこめられてから）

「サリー」と私を呼んだのは、ジークただ一人。

名前を教える気なんて、なかつたんです。

初めはジークの懐で、じつと黙つて眠つてました。

そしたら例の精霊たちが、わいわい話しかけてきて
いつの間にやら、女子会よろしく
ペチやくちや、ペチやくちや、
おしゃべりが始まつたんです。

うつかり、ジークに聞かれまして。

変なところ、妙に敏感な彼は

しゃべる占い玉の存在に気付いてしまつたところです。

「占い玉だから、オレが何か聞けば、占いのか？」

「いえ…あの。私すでに力尽きてまして。

予見はできません。過去視と遠視のみ少々
それもちょっと。やつしても必要な時だけに
お願いしたいです」

ジークはその綺麗な顎の曲線を指で撫でてから

「お前の齢は、どれほどだ？」

「お前の齢は、どれほどだ？」

えーと、1、2…

トータルで266年くらいです。

「そうか。それならオレの相談役くらいには出来るだろ」

それから毎夜、彼の話を聞くといつ役割を「えらされました。

初めのうちは遠慮がちに、勇者らしく、ぱつりぱつり。
馴れてくると時間を忘れて明け方まで。

そして今はもうさつきみたいな猫なで声で延々と。

仕事のことだけでなく、プライベートのことを何から何まで
相談しに来るので。あ、あれは相談ではないか。
単なるグチですね。

普段は無口で勇者然としている彼に

そんな側面があるなんて、はつきり言ってツボでした。
(ギャップ萌え?)

気付いたら可愛くて可愛くて。

彼が私を手放さない限りは
いつまでも精霊たちと一緒に守つていこうと
心に決めるまでに至りました。

まあ私に出来る事なんて

夜のグチの聞き役くらいですけど…

だつて私はもう懲りているのです。

下手に力を発揮して、魔法使いたちに狙われることに。

だから彼と二人きりでいる時以外では
常に眠りについています。

どこへ行くにも彼は私を携帯していましたから
昼間はひたすら息を潜めて眠っています。

彼らが王宮へ向かった時にも
私は眠っていました。
その様子を確認するのに
わざわざ過去視を使つたのは
そういう事情あつたからです。

＊＊＊

宿の食堂のテーブルで待つていると

人混みの中からアキームとレフが顔を出す。

アキームは筋肉隆々の大男。

そのオリーブ色の瞳で睨まれたら
思わず涙が出てしまいそうな
鋭い目つきと野性的な顔立ちをしている。

クセのある赤毛の上に、ぎゅっとターバンを巻き

腰には大きな剣をぶら下げている。

彼はジークのパーティに加わる直前まで

屈強の傭兵として、各地で名を上げ

『西の赤獅子』という異名を得ていた。

レフは彼とは正反対の、見目麗しい美青年だった。

柔らかい金髪を肩で結び

その上から灰色の長いマントを身に纏っている。

琥珀色の瞳が美しい、魔法使いだ。

彼は若いながらに北方の賢者の弟子で
魔術の巧みさと、容貌の美しさから

『北の金獅子』という通り名まであった。

確かに微笑む姿は天使か精霊のようではあったが
実はかなり狡猾で油断ならないことを
私は既に気付いていた。

そして私の持ち主であるジークフリードの別名は
『南の黒獅子』。

それらは周囲の人間が勝手につけた名前であったが
たまたま同じ仕事で居合わせた時に

3人はとても波長が合い

そのままパーティーを組むことになった。

食前酒で乾杯をし、黄色い液体を喉に流し込んでから
レフが琥珀色の視線を、チロツと流した。

「それ、今は起きてるんだね。珍しいじゃない

卷之六

アーニー。やつはつらつと油断がない。

でも私だつてちゃんと、こいつ以外に怪しい魔法使いがいなか
精霊に確認してもらつてから、起きてる」とにしたのよ。
だからひるんだけりしないわつ。

「いいよねえ、それ。魔力がある上に意志まで持つてて。今は大分、力が小さくなつているけどやり方次第で、どこまでも強大にすることができるよ」

「いいんだ」

ジークが緊張した声色で遮つた。

「これには今、休息が必要なんだ。だからほおつておけ」

「」

レフは悪魔の微笑みを浮かべた。

「そうだとしても、勇者が占い玉を持ち歩くなんて変じやない？やつぱり魔法使いが持っていた方が、自然だと思うけど？」

「いいやつぱり黒い！間違いなく黒系魔法使いだよ！」

「お前にはやつる」

ジークはそれだけ言うと、不機嫌そうに
グビッとお酒を飲み干した。

お~よしよし。後で頭ナデナデしてあげるからね~。

「そろそろ本題の話をしてもいいか

給仕された大きな骨付き肉をかじりながら
アキームが無表情に言つた。

いつもこんな風に他人行儀な3人なんですが
それでも波長は合つてるんですよ、ハイ。
それはそのうちこの人たちの戦いつぶりを見て頂ければ
分かると思います。

「ついさっき、精霊の言葉があつた。

新たなものが目覚める兆候、だそうだ。

同時にオレの頭の中に、暗い森のビジョンが映つた

ジークの瞳が海の底のように深い碧色に変わる。
アキームもレフも、黙つてそれを見つめた。

「森か…。少し聞き込みをしてみたところ

このところ続いている獵奇殺人は

いずれも獸に食われたよう

体の一部を失った状態で被害者が発見されたのだそうだ

アキームの言葉に、レフも重ねた。

「あの森は確かに人を食らう獸がいたという伝説がある

しかしそれは300年前に元寇によって討伐されたとあります。
た。

それがもし蘇つたとしたら、獸とは違つ何かが
関わつてゐる可能性はあるな

300年前の獸を復活させる何か。

新たなものが用覚める兆候。

無関係のように思えるが

しかしそれらがどこかで繋がるような気がしてならない。

それは同じテーブルを囲む者同士

皆同じ思いのようだつた。

「引き受けらしかなこよつだな、この仕事」

戦いの幕開けです。

第2話 甘やかします（後書き）

ジークは今のところ、3人（サリーを入れると4人）でお仕事しています。

第3話 油断ならない魔法使い（前書き）

突然ですが、小説タイトルを変えました。

第3話 油断ならない魔法使い

夜の帳の中、魔力が近づく気配に
私は目を覚ました。

何事が確認する間もなく

スルッと枕元から持ち上げられてしまう。
深く眠るジークはそれに気付かない。

やばっ、油断した。

私はそのまま、別の部屋へ
素早く持ち込まれる。

バタンとドアが閉まり
鍵のかかる音。

やつと気付いた。この気配はレフだ。
ポトンと私をベッドに落とし
ギシリと横に腰掛けた。

「やあ、やつと二人きりだね」

私は答えず、必死で眠りに落ちようとすると。
しかし魔力に邪魔される。こいつ〜！

「ジークとばつかり話してないで
いい加減、ぼくにも声を聞かせてよ」

彼の纖細で綺麗な指が
占い玉を撫でる。

私はその中でちぢりまつて
羊が一匹、羊が一匹…

「抵抗しても無駄だよ。
僕を誰だと思ってるの。
賢者の免許皆伝まで持つてている
正真正銘の魔法使いだよ。
それなのに勇者には聞こえる声が
聞こえないなんて
プライドが許さない」

そ～よね～。でも私はジークだけのもの。
羊が60、羊が61…

「…強情だよね。キリ。」
まあそこが可愛いんだけど

琥珀色の瞳が近付いてきて
綺麗な形の唇がすぐ近くで動く。

「今夜は絶対に寝かさないからね

つて、誰に言つてんだ、」「うーーー。
羊が110！ 羊が111！

「突破！」

バタン！

扉を大きく開いて

息を切らしたジークフロードが登場。
あやー！待つてたのよ。助けてっ！

「あ～あ、もう戻付こちやつたの？」

グラリ、レフは辛そうに汗田を瞑る。

「もうやつて魔法を乱暴に破られると
僕だつて傷付いちやつただけど」

先ほどまでの余裕から一変して
天使のような金髪の下に冷や汗が浮かんでいる。

「ふん。自業自得だふ」

ジークは冷やかにしつらつて
ひょいと私を持ち上げる。

「これに手を出したら

その度に魔法を破る。そのつもりでい

レフは自嘲気味に口元を歪ませ
パサツとベッドに倒れ込んだ。

「せいやい、明日の朝まで
しつかい眠つて回復しておけよ」

振り返りもせずにそつと置いて
ジークは部屋を出た。

「サリー！ すぐにオレを浮べよ！」

ジークは部屋に戻るなり
詰め寄ってきた。

「だつてレフの魔法に妨害されてたし」

「占い玉のくせに、弱つちいなあ

むひ。なによ。

むくれる私の前で
彼はふうーっと大きく息を吐き
肩を落とした。

「まあまだレフで良かった」

その言葉にちよつと考えて、私は聞いてみた。

「もしレフよりももつとすごい魔法使いとか
魔族とかに攫われたとしても
助けに来てくれる？」

ジークは碧い瞳を見開き、一瞬息を飲む。
そして見る見る赤い顔になつて、横を向いた。

「当たり前だろ」

えーと、これは勇者と占い玉の会話です。
念のため…

第3話 油断ならない魔法使い（後書き）

なんか、占い玉をほさんで、いつまつ余話になるなんて…。筆者も書いててビックリです。

第4話 森の闇

翌日は、まだ早朝の霧が消えないうちに宿を出た。

目指すのはこの繁華街から1時間ほど歩いた先にある森。（勇者たちは普通の人より歩くのが速いのでもし普通の人が歩いていたら3時間くらいかかる）

ジークもアキームもレフも押し黙つたまま歩みを進めた。

まあアキームはいつも無口だけどジークとレフまで無口なのはちがひん昨夜のやつとつのはせい。

すると珍しくアキームが口を開いた。

「これから行く森について

その占い玉は何か映し出したりしないのか？」

私について、あまり触れて欲しくないジークは眉間に皺を寄せて、アキームに視線を送った。

「特にない」

剣もほろひ、とまきこひのひ。

肩をすくめるアキームの様子にハッとしてジークは目を伏せてから、再び口を開いた。

「占い玉には、特に何も映っていないが
オレの感覚には、少しひつかかるものがある」

「ぼくもだ」

レフが低い声を漏らした。

「今朝、出かける前に森を遠視してみた。
あれは闇を内包している。

魔族は…正確には魔獸だが
契約を結んで、その闇を守護しているようだ。
森に踏み込む何者をも許さない」

レフは占い玉なんてなくとも

立派に遠視が出来る。

つぐづぐ私なんかにこだわるのは
プライドのためだけなんだよね。

「なるほど」

アキームが頷いて、オリーブの瞳を細めた。

「国王に對して、姫を攫うなんていう予告状を送ることは
魔獸にはできない芸当だからな。それで納得した」

闇を内包する森。

私もそれは感じていたけれど
何か強い力の壁に阻まれて
意識がそこから弾かれてしまう。

それは何故か、遠い昔にも
経験したことがある感覚のよつに思えた。
あれは何だつたろうか…

「闇を内包する森。

なるほど、警戒すべきは魔獸よりも
森 자체ということか。
オレの中に見え隠れする不安のタネも
そこから来るものようだ」

言いながら、ジークはこつそり手を懐に入れて
袋の中の私を確認する。

大丈夫、大丈夫。

何があつても、傍にいますからねー。

* * *

森の姿が見えてくる。

一步一歩進む毎に、拒絶の意志が強くなる。

私は耐えきれなくなつて
仕方なく眠りについた。
(わ～ん、肝心な時にゴメンナサイ)

・・・・・

しばらく眠っていたら
急に重苦しい圧を感じて、目を覚ました。

ぎしぎしそし…

ちょっととちょっと、そんなにしたら
ローズクオーツが壊れるよ。

次の瞬間、2つの赤い目が
パクリと開いて、こっちを見た。

途端に私の心は凍り付き
そこから目を離せなくなつた。

深い闇の中に浮かぶ
禍々しい意志を持つた、血のよつに赤い目。

ミッケタ。

テンセイシタノデハナカツタノカ。

コンナトコロニ

イキナガラエテイタノカ。

サリー…！

ひいいいつ！

激しい感情の嵐に吹き飛ばされそうになつて
息を飲んだ。

しかしそれはスッと、急激に冷えていった。

マダダ…

シカシカナラズ

ムカエニクルゾ。

マッティロ…

言葉が徐々に遠ざかり

そして同時に圧力も消えた。

私はへナへナと力を抜いた。

＊＊＊

私が眠っていた間、ジークたちに何が起こっていたか
過去視してみた。

彼らが森の入口に到着すると
間もなく空氣を震わす吠え声が聞こえてきた。

そして黒い影が、木々の間を
ものすごい早さで移動する。

右へ左へ、網の目を描くように
秩序無く動き回り、恐怖と攪乱を植え付けよつとしている。

ジークはスラリと剣を引き抜いて目を閉じる。

力チャリと鞘が鳴り
鋭い切つ先が濡れたように光る。

次の瞬間、頭上から足元へ一直線に
剣が振り下ろされた。

無音の一斬。

空氣を切つたようにしか見えなかつたが
直後に獣の激しい叫び声が、空氣を切り裂いた。

キエヌヌヌ…！

それを合図にアキームが剣を引き抜いて
両手に構える。

レフが呪文を唱え始める。

彼らの前に姿を現したのは

黒い毛に覆われた巨大な狼だった。

背中にはコウモリのような大きな翼を広げている。

しかし、片翼がすでに切り落とされていた。

ジークの一振りのせいだ。

そこから緑色の血が流れ出していた。

長い鼻にシワを寄せ

真っ赤な瞳を怒りに燃え上がらせ

低い咆哮を洩らす口からは

荒い息と唾液を垂れ流している。

しかしへークはそれに目もくれず

一瞬でその脇を走り抜けた。

手負いの獣の相手は

アキームとレフがする。

黒髪の勇者が目指すのは

森の奥に潜む、黒い闇。

居場所も正体も分からぬそれを

ジークはその鋭敏な勘だけで、追い詰める。

やがて森が割れ、おもむろに現れる漆黒の泉。
そこでピタリと足を止めた。

底の見えない泉から

ゆらゆら沸き立つ禍々しい気配に

ジークの黒い前髪が揺れる。

まとわりつくそれを振り払つよつこ
シユツを空氣を斬る音が響く。

彼が容赦なく振り下ろした剣は
泉を一突きしていた。

ブワッ

闇が巻き上がり、宙を舞い、回転する。
そして龍のように立ち登つた。

氣付くとその中央に、ローズクオーツの占い玉が浮かんでいた。

ジークは懷にあるはずの重みが消えていることに気付
初めて焦つた。…いつの間に！

「サリー！」

地面を蹴つて、手を伸ばす。

彼の体を、精靈の光が包み込む。

すると、渦巻いていた闇は霧散し
残された占い玉が、ジークの手に納まつた。

闇の気配はそのまま消え失せた。

黒い泉も消えた。

何事もなかつたかのように
森の沈黙が戻ってきた。

その頃、アキームは苗高く跳躍し
剣を振り下ろしていた。

その一撃で、獣の背中が真つ二つに割れる。

緑の血が噴き出して

ズシンと黒い影が地面に沈み込む。

レフがその横へ歩み寄り

指を一本立てて、空に突き上げる。

呪文を唱えた後に、言った。

「汚れた魂を手放し
土に還れ」

獣は一瞬で、骨だけの骸と化した。

私の過去視はそこまで。

今は森を歩くジークの手の上の
占い玉の中で力なく縮こまっている。

さつき聞こえた声はなんだつたんだろう…
でも思い返すだけで背筋に冷たいものが走り、ゾッとする。
やつぱりそれについては、何も考えたくない。

アキームとレフが私たちに気付いて振り返った。

占い玉の表面は、パチパチ火花を散らしていた。

「闇に触れたんだな」

そう行って、レフが近付いてくる。

「今なら、出来るかもしねないぞ」

訝しむジークを横目に、レフは白い手を
占い玉の上にかざした。

目を閉じて、呪文を唱える。

次の瞬間、占い玉の中に光が差し込んできた。

私が驚いて顔を上げると

それは目の前でカーテンのようになびがった。

やがてその光の中に、私自身も溶け出し
意識が真っ白に浄化されていく。

そして体がふわりと、宙に浮かぶような感覚に襲われた。

第4話 森の闇（後書き）

次はジーク日線のお話になります。

第5話 はちみつ色の幻（ジークの視点から）

レフが手をかざした瞬間
占い玉から飛び散る火花が
激しさを増した。

ピリピリと全身に痺れが走つたが
オレは手を離す訳にはいかなかつた。

これは今、オレにとって一番大切な存在だ。

たかが占い玉一つに、と思われるだろ？
それも大した魔力を發揮するわけでもない。

しかしその声は、戦いで荒んだ心を
丸裸」と受け止め、真綿のようになぐるんしてくれる。

勇者であるオレの
常人には到底理解しがたい感情に
そつと寄り添つてくれる。

そしてどんな嘆きや絶望も
全て希望に挿げえてくれる。

子供のようだと笑われても構わない。
オレはあれがないと
真つ直ぐ前を見て生きていくことができないんだ！

ミシミシと、ローズクオーツが軋んでいる。

「やめろー…それを壊すな！」

気付いたらそう叫んでいた。

レフの手をはね除けようとした時
占い玉の周りにフワリと光が生まれた。

それは温かいはちみつ色で
どんどん大きくなつてくる。

その光景に

突然、新たな期待が沸き上がり
オレの胸が跳ね上がる。

もしかして…

期待が期待通りであるように
神に祈りながらその光を見つめた。

すると光の中に

ゆらりと人の形が浮かんできた。

それに気付いて、レフとアキームが
ゴクリと唾を飲み込んだ。

徐々に輪郭が、色が、鮮明になる。

やがてそれは、一人の少女の形をとつていった。

ハーブランドの長く豊かな髪が

やわらかい光を放ちながら波打っている。子犬のように濡れた茶色の大きな瞳は驚きで見開かれ、きらきら輝いている。

少女らしい控えめな鼻筋と甘やかに染まる薔薇色の頬。

熟れたばかりの果実のようなピンク色の唇はふくよかで思わず触れてみたくなる。

彼女は白くて華奢な体を丸めた状態で宙に浮かんでいた。

「女神か…？」

アキームの声で

彼らも同じ場所にいたことを思い出す。

駄目だ。彼女を見てもいいのはオレだけだ。

しかしそんな心の声は叶えられる筈もなく二人は両目を見開いて、彼女を凝視していた。

少女はアキームの言葉を否定するよつに何度も首を横に振った。

そしてその大きな茶色い瞳をオレの方へ向けてきた。

「サリー…」

その名前が反射的に口からこぼれると
彼女は白い両腕をオレの方へ伸ばしてきた。

それを受け止めたくて
オレも手を伸ばす。

しかしその瞬間、スッと光が消えて
目の前には占い玉と
暗い森の景色だけが残された。

何が起きたのか理解できず
オレはしばらく呆然と宙を見つめていた。

「サリーと言つていたな。

あれは占い玉の中にあつたものなのかな?」

アキームの問いに
レフが頷いた。

「そうだ。闇に触れて
一時的に魔力が強まっていたから
外から力をぶつけて、引っ張り出してみた」

言つてから、レフにしては珍しく
僅かに顔を赤くして、口に手を当てる。

「まさかあんな姿をしているとは
思つていなかつた」

「ジークはいつもあれと話していたのか?」

アキームも興味を引かれたようで
複雑な表情をして聞いてくる。

オレは一人のそんな様子が
何故かどうにも我慢できなかつた。
でもだからと
どうすればいいのかも、分からな…

「そうだ。声は聞いていた。
しかし、姿見たのは初めてだつた」

そう答えてから、レフの方へ歩み寄り
ぐいっと聞合いを詰めた。

「レフ」

「な、なんだ」

「もう一度やれ」

は?と呆けた顔をしているので
更に「ジリと聞合いを詰める。

「もう一度やれ!」

「む、無理だ！」

レフがオレを手で制して、必死で答えた。

「あれは占い玉が闇に触れた直後だつたから
できたことだ。今はもう無理だ！
それに出来るならお前に言われなくて
やつてる！」

なんだそれは！

オレの心中に
もう一度会いたいという炎のよつた思いと
誰にも横取りされたたくないという焦燥感が
嵐のように吹き荒れた。

「出来る奴はいないのか！？」

「ぼくの師匠の賢者であれば
もしかしたら……」

「よしー行こ！」

「待て待て待て！」

走り出そうとしたオレの首根っこを
アキームの太い腕が掴み上げた。

「魔族討伐の依頼主のことを忘れていないか？」

仕事の後始末と報酬の受け取りはキチッとやらなくてはならない。

それに…」

言いながら、オレの手の上の占い玉を指わす。

「本人に聞いてからの方が
いいんじゃないか?」

・・・・・

くやしいが、アキームの占いとは正しき。

呼吸を整えて
サリーの様子を伺つた。

「先程の衝撃で

今は眠つてゐるようだ」

「よし、まずは仕事を終わらせて
その後でじっくり考えよう。

オレもその占い玉の言葉が聞いてみたい」

横でレフも頷いた。

聞かせてやるものか!と思つもの
この状況でそれは無理なんだろうなと
オレは大きなため息をついた。

第5話 はちみつ色の幻（ジークの視点から）（後書き）

頑張れ、ジーク！ 次からまたサリー田線に戻ります。

第6話 聞の声

み、見られた～…！

どきどきどきどき…

激しい鼓動が占つ玉の中を響き渡つている。

あの時、田の前が真っ白になつて
何かがぶつかるような衝撃を感じた。

そして目を開いたら

驚いたジークとアキーム、レフの顔があつた。

私の体はまだ占い玉の中だつたけど
意識だけが外に引っ張り出されていた。

だけど彼らには、私の姿が見えるみたいだつた。

「女神か？」といつアキームの問いかに
頭をぶんぶん横に振つて否定する。

そんな神々しいもんじゃないです。

確かに260年以上生きてる（？）けど。

ジークに視線を移すと、今までに見たことがないくらい
田を見開いて、凍り付いている。

「サリー…」

その綺麗な口元から私の名前が洩れる。

そうよ、そうよ。私はあなたの占い玉よ。

嬉しい気持ちがあふれ出して、両手を伸ばすと
彼もそれに応えるように、こちらへ手を伸ばしてくれた。

あと少しで届く…

そう思った時、景色は暗転。

私の意識は、占い玉の中に戻っていた。

あ～、良かった…。

手が届かなかつたことを残念に思う気持ちもあつたけど
それよりもずっと、元の場所に戻れたことに
安堵する気持ちの方が大きかつた。

ただの人間だつた時間よりも

占い玉稼業の時間の方が、遙かに長いからな～。

正直、もう私には人間に戻りたいなんて気持ちは
これっぽっちも残つていなかつた。

」のままひつそりと、ジークの傍にいられるだけでいい。

でも… ジークはどう思ったかな？ 私のこと。

元は人間だったこととか

こんな姿なんだってことを知つてしまつたら
彼は私に対する態度を

変えてしまつたりするのだろうか…

そんなことをいろいろ考えて

私は赤くなつたり、青くなつたり…

そのうち頭が重くなり

襲つてきた睡魔に抵抗できなくなつた。

＊＊＊

私が眠つている間、彼らは今回の
魔族討伐の依頼主のもとを訪れていた。

その様子は、過去視で確認。

お城の謁見の間では、討伐完了の報告を聞き

国王はもちろん、大喜び…

と、なりかけたところでジークが静かに手で制した。

漆黒の美しい瞳が、国王と側近の人々の顔を見渡し浮き立つ空気を無言で諫める。

「姫を攫う、と書かれた脅迫状を見せて頂けますか」

ジークの落ち着き払つた声に圧倒されつつ国王はこぐくこぐく頷いて、宰相に指示を出す。

うやうやしくトレイの上に載せられ、差し出されたのは銀色の小箱だった。魔封じの術がかけられている。

レフが進み出て、小箱の術を軽く指で払う。

鍵がカチリと外れる音が響いて

その場にいた人々が、息を飲んだ。

中から出てきたのは、漆黒の封筒とカードだった。文字は銀色のインクで刻まれている。

レフは綺麗な指でつまみ上げ、それを確認した。

「確かに、あの闇と同じ魔力を感じます」

そうか、とジークが無表情のまま頷く。

「それで、その効力はどうだ？」

「既に目的を完了、もしくは失っているため
しばらくすれば自然消滅するでしょう。
しかし微細な魔力であっても、場合によつては
周囲のものに悪影響を及ぼすことがあります。
この場で間違いなく消しておくことが最善かと」

静まりかえる広間の中、ジークは馴れた様子で
国王に向き直つた。

「ということです。残りの魔力をこの場で浄化して
よろしいでしょうか」

あまりこいつこいつたことに馴れていたさうな国王は
戸惑いながら、頷いた。

「う、うむ。よろしく頼む」

その声を合図に、レフが呪文を唱え始める。

すると彼が纏つていた灰色のマントがふわりと舞い上がり
フードが外れて、そこから綺麗なブロンドの髪がこぼれた。

琥珀色の瞳が金色に妖しく瞬き、彼の美貌を際だたせる。

思わず皆が見とれていると、彼の白い手が
漆黒の封筒とカードの上へ移動した。

パッと閃光が走り、その中で小さな黒いものが

苦じむよつに「づ」めぐ。そして粉々に粉碎された。

直後に光も封筒もカードも消え失せ
空っぽの銀の小箱とトレイだけが残された。

すると次にジークが両手を広げて目を閉じる。
何か小さく囁えると、彼の細身な身体を中心につわりとやらわやかな風が沸き上がった。

その風はスッと、周囲に広がって
人々の頬に触れ、カーテンを僅かに動かし
そして部屋の外へ流れ出していく。

やがて漆黒の髪の勇者は目を開けて、ほっと息を吐いた。

「魔力を浄化した後、精靈の力で城を清めました。
これでもう安心です。姫君の危険もないでしょ?」

おおおおつーと、今度こそ広間に歓声が溢れた。

そして国王の横から、バカ娘…もとい姫が登場。

「お助け下さいまして、ありがとうございます。勇者やま」

お化粧バツチリの目元を、パチパチパチパチ瞬かせ
ジークの側に駆け寄った。

「民だけでなく、可愛いサリーをも救つて頂き
心から感謝する。

そなたたちの希望は何でも叶えるぞ。

姫婿の座も、やぶさかではない」「

明らかに親バカな国王も、興奮気味で言つ。この親にして、この子あり…

つていうか、「サリー」？

えへ、この姫、私と同じ名前だったんだ。

ジークとアキームとレフは一瞬、顔を見合せたが、努めて表情を変えないまま、再び国王へ顔を向けた。

「我々は、戦いを生業とする身ゆえ

常に魔の亡靈につきまとわれております。

私と結ばれるとあれば、亡靈は伴侶にも否応なく襲いかかるでしょう。

そのよつた重荷は、姫には似つかわしくないかと…」

亡靈…

ジークの言葉はもちろん、でまかせだったが

レフの魔術と彼の精靈の力を田の当たりにしたばかりのタイミングでは

十分説得力のある単語だった。

姫は簡単に震え上がり、国王も顔を蒼白にした。

「わ、分かった。では欲しいもの有何でも言ってくれ

結局、はじめから提示されていた報奨金と

今後、勇者から要請があった際には協力を惜しまないという

契約を交わして、城を後にした。

今回の件は、そうして無事に決着がついた。

いや、「無事」ではないと、心のどこかが警戒する。

狙われた私と同名の姫。
闇が発したあの言葉。

そして呼び声。

マッティロ…

そう言つていた。

身に覚えがないのか、と問われると
それはいくらでもあった。

私に痛めつけられ、恨みを持つているだろう
魔法使いたちはたくさんいる。

そして彼らは既にこの世の者ではない。

闇の魔力で復活し、復習しに来る可能性は否定できない。

でも、名前まで知っているなんて…

私の頭を、一つの可能性がよぎり
あの血のように真っ赤な目を思い出して
恐怖が吹き出す。

しかし頭を振つて、その可能性を必死で否定した。

違う。の方である筈がない…

私は神に祈らずにはいられなかつた。

第6話　闇の声（後書き）

このへんのお話しばかりと終わらすつもりだったのですが、結構長くなってしましました。

第7話 変化する思い（前書き）

何日も間が空いて申し訳ありませんでした。いろいろ別のことで忙しくなつてしまつたのと、ちょうど重要な場面だったのと、執筆にも時間がかかりました。文章力のない自分を改めて不甲斐なく思つ今日この頃です。

第7話 変化する想い

「風呂場にまで持ち込んでいたから
一体どういう変態なんだと思っていたんだが
今日のアレで合点がいった」

「なんだそれは…」

ジークが盃に唇を寄せながら
碧い目で声の主を睨む。

しかしアキームは至つて大真面目のようだ。
笑いもせず、からかっている様子もなく
至つて平静。まあそもそも
簡単に心の内を見せるような男じゃない…。

お城から戻ったジーク、アキーム、レフの3人は
宿の食堂でお酒を軽く酌み交わしているところだった。
私はちょうど遅い昼食が終わつた頃に
目を覚ましたらしい。

「ぼくもさ、ジークが内緒でしょっちゅう
腰の袋を確認してたの、気付いてて
大丈夫なの?って思つてたんだよね」

レフの方は天使の顔に

意地悪い悪魔の微笑みを浮かべていた。
黒い！ こいつ本当に黒い。

ジークはむすっとしながら、僅かに耳を赤くした。

「ほりとた」

そっぽなんて向こちやつて、拗ねてます。

あ～、癒される。

やつぱりあんたはカワいい。誰かせんと違つて。
なんか私まで苛めたくなつてきた…

密かにムラムラしていくら

「おひ。田を覚ましたみたいだよ」

レフの言葉で、テーブルの上の袋に入った私に
視線が集中する。わわつ

「よしひ。じや あジークの部屋に行こう

「やひじよう」

「なつ。ちよ、ちよつとー」

アキームとレフが勢いよく立ち上がり
わざとそこを歩き出す。

ジークはあわてて私をテーブルから取り上げ
その後を追いかけた。

「なんだよ、オレの部屋つて」

「 もううん、 サリーと話しをするためだわ 」

レフの答えに、一瞬啞然としたが
我に返つて、慌てて一人に追いすがる。

「 サリーに話つて、どうじう」とだよ

「 なに? この期に及んで
まだそれを独占しようつて訳? 」

レフは苛ついた様子で

琥珀の瞳に、悪魔の色を濃くした。
冷たい美貌が凄みを増す。

「 ぼくらに毒を盛られて横取りされる前に
4人で話す場を持つておいた方が、賢いと思つけど? 」

さ、さすが黒魔法使い! 脅し方が板に付いてます。
てゆーか、あなた味方キャラでしたよね? ?

ぐぐぐ……、ビジークは言葉に詰まつた後
はああ~と肩を落とした。

そして渋々、一人を自分の部屋へ招き入れた。

質素なベッドの真ん中に

私（占い玉）がポトンと落とされ
その回りに魔法使いと傭兵と勇者が
ぐるりと囲んで腰を下ろす。

「さて、顔を合わせた訳だし
さすかに口をきいてくれるよね？
サリー」

名前を呼ぶなんて
馴れ馴れしいぞ、黒魔法使い！
ふてふてしさに、むつとして
私はとことん抵抗したかったけど
レフ、そしてアキームまでが
眼力に気迫を込めて
のしつと詰め寄つてくる。

本当はジーク以外と言葉を交わすなんて
したくないんだけどなあ…。

でも、これ以上無視をし続けると
彼への風当たりが益々強くなりそうだ。

「これは仕方ないか。

ああ、私ってつくづく弱い…

「少しだけですよ。
私の所有者はあくまでも
勇者ジークフリード一人ですから」

ため息混じりでそう言つと
周囲は息を飲む。

「氣のせいじゃない。声が…」

「しゃべつた…」

「サリー…」

それぞれに思い思いの声を漏らし
彼らは一段と包囲網を縮めてきた。

私が占い玉の中でダラダラ冷や汗をかいしていると
明らかに興奮している一人を目線で制して
ジークが最初に会話の口火を切ろうとしていた。

今まで決して人前で私に話しかけなかつた彼。
でもそんなこと、どうでもよくなつてしまふくらい
その質問だけは誰にも奪われたくなかつたのだろう。

「サリー、きみ
もとは人間だったの？」

とても真剣な眼差しだつた。

「… そうだよ」

私は小さな声で、すくなく短く答えた。

だつてね、それつて私にとつては
もう何の意味も持たないことな。

250年間、占い玉から出られずにいたのだから
かつて人間だつた16年なんてそれこそ
束の間の夢みたいなものだ。

ジークが見たあの姿は
ただの幻でしかないんだよ。

しかしその答えが
ジークにとってどれだけ大きな意味を持つのか
次の瞬間、思い知らされることになる。

彼の碧い瞳がみるみる輝きを増し
こちらを見つめる視線に熱がこもる。

まるで、少年が宝の地図を見付けたように
沸き上がる喜びと期待を押さえることが出来ずには
微かに頬を上気させる。

占い玉である私へ向けていた気持ちが
明らかに別の形を取り始める。

そして堰を切つたように
甘やかな感情が流れ出した。

が、すぐに躊躇いたようにカクンとそれが止まり
瞳にみるみる深い影が射し込んだ。

「サリー、キミは何者かの魔力で
そこへ閉じ込められたんだね？」

ジークは掠れた声で聞いた。

私は肯定の意味の沈黙を保つた。

「どうして…」

更に質問してくる彼に
私は力なく答えた。

「独占欲… だと思つ」

するどギリッと
歯を食い縛る音がする。

「オレは生きをそこから救い出したい」

低いけれど強い口調でジークは言った。

「無理よ」

感情のない声で私は否定した。

「あの方でないと、この封印を解くことはできない。
そしてあの方は遠い昔、この世を去ってしまった。
私を置き去りにして」

言い終わると、ジークの気配が変化したことに

気が付いた。

視線を上げると、そこには
烈火の「」とく
怒りの感情を爆発させてい
る
彼の姿があつた。

「誰なんだ、それは！」

敵前ですら聞いたことのない荒々しい声に
その場にいた誰もが、目を見張つた。

「エルドラードの国王、ヴァンクリフ」

燃え上がる瞳に操られるように
私は意思を失つたまま
機械的に口を動かしていた。

「150年前に滅亡した魔法の国の
伝説の王か……」

アキームが呆然と呟き
レフが目を細めて黙りこむ。

ジークは身の内の焰をグッと押さえ込みながら
低い掠れ声で言つた。

「亡者相手では分が悪いな……」

つてちよつと、何しよーと考えてる訳?

すると何かを考え込んでいたレフが神妙な表情で口を開いた。

「あの闇の魔力は
サリーの占い玉と共に鳴っていた」

その言葉に、私の胸がドキンとした。

「闇の魔力であれば、もしかしたら
サリーを閉じ込めている封印を
破ることが出来るかもしだれない。
そしてあの闇はほぼ間違いなく
エルドラード国と関わりがあると思つ。
サリーは何か思い当たることはない？」

占い玉の中について表情が見えないことに
感謝しながら、声が震えないように話した。

「分からぬ。闇へ意識を向けると
何か強い力ではね除けられてしまう……」

嘘ではなかつた。

ただ、あの赤い目と禍々しい声のことは
言いたくなくて、見抜かれないように
必死で心に蓋をした。

どうか、トレフは頷き、言葉を続ける。

「あの闇は、まだ微力で
魔獸を操るくらいのことしか
出来ていなかつた」

占い玉の中の私の、耳を塞ぎたい思いなんて
彼らに分かる筈もなく
その場の思考は闇の存在へと集中する。

「姫を拐うと書かれた手紙。
あれは手紙という形をとつてはいたが
正体は使い魔だ。
人の中に忍び込み、密かに
闇の意思を植え込むことが
本来の目的だつた」

あの時、レフの白い手の下で
黒い小さなものがうごめき
粉々になつた光景が思い出された。

そしてその後、ジークは精靈の力で
城を清めていた。

あれにはそういう意味があつたんだ。

黙つて聞いていたジークは
宙を睨みながら口を開いた。

「オレは森の奥の黒い泉を斬りつけ
そこに精靈の力を流し込んだ。
すると闇は霧散して消えた。しかし…」

言いながら、彼の目元に
ほの暗い感情が浮かび上がる。

「そんなもの、一端を僅かに拝つた
だけのことだと、その時の感触が伝えてきた」

彼の碧く静かに燃える瞳が
まだ見ぬ、恐らく今まで最大の敵を
捕らえていた。

「あれが正体を現すのは
きっとこれからだ」

マッティロ…

闇の声が再び頭の中に響いてきて
私は逃げ出したかった。

「ぼくの師匠は、エルドラードについて
多分、最も詳しい人物だ」

レフは静かに言つて
二人に視線を巡らせた。

「話を聞きにいくか」

沈黙の中で、彼らは頷きあつていた。

第7話 変化する思い（後書き）

ふう…。なんとかここまで。さて次は、ジークとサリーの甘々タイ
ムで発散だ！

第8話 もう一度…

3人の間で、北の賢者を田指して旅立つことが決まるとジークはさつさと会議の終了を宣言し二人をグイグイ部屋の外へ追い出した。

「じゃあ、明日！ おやすみ」

ガチャリと鍵をかけ、ついでに精霊の力を借りて丁寧な結界も張り、窓もカーテンもキッチリ閉めてやつと安心したように、ふうーっと肩を落とした。

そして少し日焼けした綺麗な顔を上げるとベッドの上の占い玉へ視線を移してからゆっくり歩き出した。

カツカツカツ…

歩み寄るにつれて、徐々にその碧い瞳が熱を帯びる。

ギシリとベッドに腰を下ろして、毛布に右手を突き前髪がかかるくらいまで近く、精悍な顔を近付けてきた。

「サリー…」

絞り出された声は、苦しげに掠れている。

「二人で、遠くへ逃げよつか…」

宝石のような碧眼を、あふれる思いで潤ませながら
占い玉の中の私を捕らえようと、深く覗き込んでくる。

あ、甘い！ 甘いよ！ その瞳。

ドッキドキの私の目の前で
形の良い口元から、甘やかな微笑みがこぼれた。

「なんて、出来ればとっしゃつてみるよな…」

自嘲気味に瞼を伏せ、黒い前髪をかき上げる。

くううう… たまらん。

思わず魔法で、頬を優しく撫でてあげた。
すると長い睫の下で、碧い光が揺らめいた。

「魔法じゃなくて、サーーの手で触つて欲しいな…」

ズギューン…

瞬殺されて、声を出せずにいると

綺麗な指が、スッと占い玉の表面を触れる。

「どうしたの。声を聞かせてよ」

な、な、な…

なんなの、なんなの、なんなのーー！

昨日までの甘えたな男の子が
なんでたつた一日で、こんなフェロモンむんむんになつてんのよー。
ゆ、ゆるせよ。

私は魔法でジークの右耳を思いつ切り引つ張り上げた。

「いたたたたつ！ ごめん！ って何、怒つてるのー？」

「なんかむかつくのよつ

「な、なんだよ、それ！」

痛みに涙を溜めている姿を見て
ちよつとイライラが納まつたので、開放してあげた。

しかし、お年頃の勇者様は

一度、色に染まつてしまつと、もう取り返しがつかないらしい。

「なんで機嫌悪いの？ 教えろよ

怒られた子どもみたいに膝を抱えて

チラリと流し田でこちらを見る姿すら、色っぽい…

あー、ダメだー！ つや…

「他の人と、私の名前を教えた罰よ」

そう言つと、ジークは見る見る肩を落として

子犬のように、キューンと小さくなつた。

「「」ぬん…」

それだけ言つと、膝に顔を伏せてしまつた。
少しの間、そのまま沈黙して動かない。

やがて顔を上げたけど、こちらを見ようとはせずに、
横を向いて、口に手を当てた。

「オレも失敗したと思つてゐる。あいつらに声まで聞かれて…」

そーよそーよ、寄りにも寄つて、あの一人に。

「あいつらがいる所で姿なんか見せたサリーが悪いんだつ

む。な、なんだとつ。

そんなの、私の意志じゃなかつたでしょ！

しかし私が言い返すよりも先に

「どうしてオレと一入きりの時にしてくれなかつたんだ！」

彼は、そう吐き出していた。

ギシッ

気が付くと、ジークは顔を上げ
切なげな表情でこちらをじつと見つめている。

「サリーはオレのものなのに……」

じりじりと、灼けつくような視線が
私の胸に何かを刻み付けようとしている。

「ねえ、もう一度、姿を見せてよ……」

ギシッ

再びベッドを軋ませて、ジークが身体を近付けてくる。
「そんなの、無理って知ってるでしょー。」

ついつい声がうわずっててしまう私の上に
グラリと彼の影が覆い被さってきた。

「綺麗だつたな、サリー……」

既に直視できなくなつた私の耳元に
うつとりと夢見るような彼の声が届く。

「ハニー、ブロンドの髪はとても柔らかそりで
指に絡めて、梳かしたかった」

はあつ……と、熱い吐息が漏れる。

「大きな茶色い瞳が可愛くて、
そこにオレの姿だけを映したかつた。
白くて華奢な身体は優くて
丸ごと抱いて胸の中に閉じこめてしまひたかつた」

い、一体、どんな顔して言つてんの！

思わず視線を向けてしまい、すぐに私は失敗を悟つた。
待ち構えていた碧く燃える瞳が、容赦なく私の意識を絡め取り
あふれ出す思いのうねりに、巻き込んでいく。

そして身動きが出来くなつた私の心へ
更に彼は言葉をねじ込んできた。

「柔らかそうなバラ色の頬、そしてピンク色の可愛い唇に…
何度も何度もキスしたかった…！」

・・・・・

「うつ。く、くつわ…

あまりの衝撃に、私は息をするのも忘れていた。
そんな」ととは気付いていないジークは
トドメの一言。

「今、キスしたら怒る？」

ドカンッ！

私は反射的に、魔法で素敵な頭をぶん殴っていた。

ぴよぴよぴよ… 田を回した勇者様はそのまま翌朝まで眠りこけたとさ。

やれやれ…

第8話 もう一度…（後書き）

ほんとに、やれやれです…。今後のジークの暴走が心配。

第九話 右者の右腕（右腕や）

流血の場面があります。苦手な方は「」注意下さい。

第9話 占者の予言

「うわっ！ 危ない！」

大きな声に、私は目を覚ました。

それは占い玉が、スルリと袋から飛び出し
宙を舞つて いる瞬間だつた。

この高さから落ちると、割れる！

そう身構えた時、大きな影が覆い被さり
落ちる直前に、私を受け止めてくれた。

しかし直後に、ドスッ という嫌な音がする。

「アキーム！」

ジークの叫び声に、はつと顔を上げると
私を抱え込んだアキームの脇腹に
短剣が刺さつていた。

ドクドク… 真っ赤な血が噴き出して
思わず、気を失いそうになつた。

サルルート国 の北の国境 にある商業の町ツグニ。

市場が建ち並ぶ賑やかな通りで、私たちは買い物をして いた。

これから余 に行く予定の

レフのお師匠さん である 賢者さん がいるのは

北の果ての聖地。つまり極寒の地。

私は占い玉の中だから

温度調節ばっちりで、寒くないけど

もしやうじやなかつたら、絶対に行きたくない場所。

とこいつことで、ジークたちは上着やらブーツやらの装備を
買い揃えることになつた。

すると、人混みの中、一つの噂が
耳をかすめた。

「魔王……？」

「……復活」

「占者の予言だつた……」

魔王復活？

なにそれ。

ジーク、アキーム、レフの足が揃つて止まり。
そしてくるりと進行方向を変えた。

足早に市場を抜けると、人の少ない裏道へ入つていく。

途中でジークが占い玉の袋に触れる。

「サリー、これから知り合ひの占者を訪ねる」

あ〜、はいはい。

では私は、感付かれないように瞬つとります。

グウ〜

という訳で、ここから以降は、またまた
過去視で見た様子です。

細い路地にカツカツ： 3人の靴音が響き
やがて一つの簡素なドアの前にたどり着く。

トントントン

ジークがノックをして一步下がり、返事を待つた。

少ししてカチャリと、扉が開く。

「ビバゾ」

中から小さな声がして、それを合図に3人は扉の内側へ身体を滑り込ませた。

それは暗い、小さな部屋だった。

一組のダイニングテーブルと書類棚のみが並んでいる。

そこに、ゆらりと一人の細い影が現れる。

お、お化け?????

ジークはその人物に向かつて口を開いた。

「相変わらず暗い部屋だな、シユクレ」

「申し訳ありません。今、蠟燭を点けましょう」

それは優しく穏やかな女性の声だった。

魔力を扱えるらしく、ぱぱぱっと各所に置かれた蠟燭が一斉に灯る。

それに照らし出されて、部屋の女主人の姿を見ることができた。

灰色の長い髪に、白く細い顔。

飾りのない茶色のローブを身に纏っている。

しかし地味な色合いの中にある顔立ちは美しくて纖細で、同時に、高貴さも漂わせていました。

田は閉じたままだった。

それで分かった。彼女は盲田なのだ。

「勇者ジークフリード様、魔道士レフ様、『無沙汰しております。そして傭兵アキーム様…』

ふと、アキームの名前を呼んだといひで、言葉が止まる。

「『無事で何よつで』『わざこます…』

当のアキームは無言のまま、彼女を見つめていた。オリーブの瞳に、複雑な色を浮かべて。

むむむ、何かある？　この一人…

「旅の途中でございましょう。

ここは何もない粗末な部屋ですが、どうぞ『わづななつて下れ』

シユクレは3人に椅子を勧める。

「今、お茶をお持ちしますので
少々お待ち下さいませ」

するとアキームが初めて口を開いた。

「ずいぶんと物騒なことを口走ったようじゃないか」

ずいっと進み出で

台所へ入ろうとする彼女を制した。

「オレたちにも聞かせてくれないか」

アキームの低く、くぐもった声は

女子供を震え上がらすに十分な迫力を持っていた。

もしかして、アキームは怒ってるの？

しかしシユクレは取り乱すことなく
静かに頷いて応えた。

「承知いたしました」

そして3人をテーブルに座らせながら
自らも一緒に座に着いた。

「それはつい数日前、突然占い玉の中に現れました。
禍々しい意志を持った、闇の存在です。

私は、魔王復活と同義だと判断しました。

世界中の占者たちも、同じものを見ている筈です。

しかし、恐ろしくて誰も口に出せないので

その言葉に、3人が顔を見合わせる。

闇：

「なぜ、お前はそれを口にしたんだ？」

そう聞くアキームは、真剣な表情だった。
やつぱり彼は、シユクレのことをとても心配しているようだ。

「残された時間は僅かです。

少しでも警戒を強めておいた方がいい。
それに…」

彼女は、ふっと寂しげな微笑みを浮かべた。

「私には失うものなど、何もありませんから」

「シユクレ！」

ガタン！とアキームが立ち上がる。
それをジークが制し、目を細めて彼女を見て
首を横に振った。

「そんなことを言つてはいけない、シユクレ」

すると、彼女は白い顔を俯かせた。

「申し訳ありません…」

アキームが、ふうっと大きく息を吐いて
椅子に座り直した。

えつとつまり、魔王復活と予言したのはこの女性で

そして3人の知り合い、ということなのね。

シユクレは少しの沈黙の後、僅かに頭を振つてから再び顔を上げた。

「ジークフリード様。ところで一つ、お聞かせ頂けますか?」

そしてその視線が、ジークの腰へ移つた。

「なぜ、レフ様でなくジークフリード様が占い玉を持っていらっしゃるのでしょう?」

「ああ、それは…」

思いがけない問いかけに、ジークは少し言い濁んだ。

「西方の国の…廃墟となつていた城で夜を明かした時
たまたま見付けたのだ。しかし大した魔力を宿していなかつたので
もらい手がなくて、持ち歩いている」

う~ん、やや苦しい気もするけど、確かに嘘はない。

「そうで、『や』いますか。確かにあまり力を感じませんね。
ただ…」

シユクレは小さく首を傾げた。

「何でじょう? 中に何かの気配を僅かに感じるのですが…」

「それは…」

少し興味を惹かれたようで、ジークとレフが身を乗り出した。

「どんな気配だらうか？」

バタン！――！

レフの言葉が終わらないうちに、突然、玄関のドアが開いた。

そして、ピコッ！と風が部屋の中を駆けめぐる。

「なんだこれは！」

3人は立ち上がり、アキームは大きな体で
シユクレをその影に隠した。

ギリッ！と、レフが唇を噛む。

「気配に気付かなかつたとは……！」

「何者だ！」

シユウウ……と、嫌な気配が

ドアを潜つて、部屋に足を踏み入れるのが分かつた。

振り向くと、真つ黒なフードに顔を隠した人物が立つていた。
目だけが真つ赤に光つている。

狂氣を孕んだその赤い皿に、その場にいた者は皆背筋をゾクリと震わせた。

「あの方を邪魔する者は、…消す！」

ドウンッと突風が黒いマントの男の背後から襲いかかり気付くと、2つの占い玉が、宙に浮いていた。

一つはシユクレの。そしてもう一つは、あたしだった。

この高さから落ちたら、割れる！

ガチャーン！と嫌な音がして

先にシユクレの占い玉が床に叩き付けられたのが分かった。

次は自分と思い、ぎゅっと皿を閉じ身構える。

占い玉が割れたら、私はどうなるんだろう？…どうなるんだろう？…

不安がぐるぐる、頭の中を駆け巡った。

しかしそれは起きなかつた。

大きな影が覆い被さり

落ちる直前に、私を受け止めてくれた。

見ると、アキームだつた。

あ、ありがとう！

しかしそれで安心など、してはいけなかつたんだ。

フードの男が両手を上げた。

そこから数え切れない程の短剣が、こちらへ向かつて矢のように襲いかかってきた。

キンシと、ジークが剣でなぎ払つ。

しかし咄嗟のことだつたので、全てを落とすことは出来ない。

勢いを保つたままの一本が

ドスッと嫌な音を立てた。

「アキーム！」

ジークの叫び声に、はつと顔を上げると
私を抱え込んだアキームの脇腹に
短剣が刺さつていた。

ドクドク…真っ赤な血が噴き出して
思わず、氣を失いそうになつた。

目に見えない早さで、ジークが移動して

次の瞬間には、フードの男を真つ二つに斬つていた。

レフが呪文を唱えてから、指を頭上に掲げる。

「闇に捕らわれし魂よ。己に帰り、黄泉へ去れっ！」

ブワッと男の顔が霧散して、残されたフードだけが
ふわりとその場に舞い落ちた。

「魔剣にせられてる。これはまずい…！」

うすくまるアキームに駆け寄り、レフが叫んだ。
ギリッヒジークは歯をぎりした。

「魔剣ですつて…、何てこと…！」

アキームの身体を真っ赤に染める大量の血を目の前にして
シユクレも私も凍り付いていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8930v/>

恋する占い玉

2011年8月29日00時56分発行